

## 目 次

はじめに	1
1 反駁に同調する	9
2 打ち碎かれた期待	10
3 歌に隠されたメッセージ	11
4 ありがたい本の呪いの言葉	13
5 反例に耳を傾ける	14
6 ショーペンハウアーの知能試験	15
7 私の前提に関する大ボケ	17
8 トベルスキーの知能試験	18
9 生死にかかわる問題	21
10 不可識別者同一の原理	21
11 識別不可能な錠剤	22
12 クローバーと千鳥の見分け方	22
13 論理学者の感情の範囲	22
14 カラカラ浴場の小石	23
15 暗殺の証明	25
16 後継者の後を継ぐ方法	25
17 すべての論理学者が聖人ではない	26
18 ルイス・キャロルに垣間見る『メノン』の奴隸少年	29
19 古参科学者	30
20 さらなる証明を	31

21	エミリ・ディキンソンのハチドリ	33
22	プラトンの詰め込み問題	34
23	うっかり者のテレパシー	35
24	順序の不在と不在の順序	36
25	不在者の無視	36
26	子供耐性	38
27	ウィトゲンシュタインの平行四辺形	44
28	平行四辺形の面積を求める	44
29	フロイト対夢見る論理学者	47
30	蝶は夢を見るか	50
31	デカルトの消失	53
32	もっとも公平に分配されたモノ	55
33	粹にはめられた公平性	56
34	より公正な食器洗いの分担に向けて	56
35	食器洗い当番が見落としたこと	58
36	発展的自滅	62
37	抜き打ち試験	62
38	グレシャムの法則を強要する	63
39	数に対するグレシャムの法則	64
40	一番不精な背理法	65
41	旅のエア連れ	66
42	双子都市の競争	67
43	二人でフグを	68
44	名前当て	69
45	リチャード・ファインマンは矛盾している	73
46	ガルブレイスの牝牛	75
47	赤ちゃんの論理名	77
48	相対的に悪い名前	80

49	ローマ人と類似のユーモア	81
50	言語の獄舎	82
51	バイリンガルのユーモア	82
52	ピエールのパズルと暗黙の人種差別	85
53	大文字の発音	85
54	論理的に完璧な言語	86
55	眉による句読記号	86
56	キエルケゴールの1天文単位のダッシュ記号	87
57	片目を閉じる	88
58	「ゆえに」記号	94
59	18頭目のラクダ	96
60	否定によるナンセンスの判定	97
61	Oのやりくり	102
62	ルイス・キャロルの回文たっぷり	103
63	ないものねだり	108
64	何事も可能なのか	112
65	半分満たされているのか半分空なのか	114
66	科学的酒飲み	116
67	無自制はイカれているのか	120
68	無自制の治療法	121
69	ルイス・キャロルの豚のパズル	123
70	小から大へ行ったり来たり	126
71	滑りやすい坂を途中まで下りる	127
72	今度はポジティブ思考	128
73	常軌を逸した量	132
74	ニュージーランドのアーサー・プライアー	135
75	もっとも離れている首都	138
76	「オーストラリア」の論理	138

77	予言者を予言する	140
78	硬貨投げによる解放	141
79	偏りのある硬貨で公平な硬貨投げ	143
80	無作為な選択を予言する	143
81	氷上のウイトゲンシュタイン	145
82	論理的帰結の耐えられない軽さ	146
83	不可能犯罪	148
84	二股信奉	149
85	不可能を成し遂げることの害悪	150
86	同一性泥棒	152
87	無限チェス	152
88	2分間の無限論争	153
89	インド式討論競技会	154
90	負けるが勝ち	155
91	自己チューの最小化	157
92	アラビアのロレンス, ヒョウに首輪をつける	158
93	橋桁のない橋	159
94	鄧析の助言	160
95	タレスによる影を使ったピラミッドの計測	163
96	牛痘伝染問題	163
97	カントの手袋	164
98	対蹠点アルゴリズム	165
99	機能語の不可視性	166
100	必要な無駄	175
101	反例の芸術	178
102	スケール効果の哲学	181
103	つつましやかな訓練	186
104	視覚の哲学	187

105	アブリオリな嘘の総合命題	201
106	アブリオリな受動的ごまかし	203
107	クレタ島再訪	207
108	ムチノ教授	207
109	石には何も書かれていない	211
110	自己実現的かつ自己破滅的な予言	211
111	学者の陳情	211
112	ナポレオンのメタ発見	212
113	演繹に関するハンディキャップ	214
114	論理的侮辱	215
115	論理的謙遜	216
116	不敬なトートロジー	219
117	一般性ジョークと無矛盾性の証明	222
118	ありなのか, そして, ありではないのか	225
119	ロブスターの論理	225
120	3重契約	230
121	ボルテールの大博打	231
122	聖書の数え上げ	232
123	ラッセルも筆の誤り	233
124	最初の女性哲学者は誰か	237
125	ブリトーはサンドイッチか	240
126	2番手	241
127	ドラクマの不備	243
128	非論理的硬貨蒐集	245
129	サンチームと『壇の子鬼』	245
130	意見の一致	247
131	ゲティアのもっとも極端な事例	247
132	早すぎる説明飽和	253

133	逆立ちした善意	256
134	善意は集団信念に適用されるか	257
135	レイク・ウベゴンの人口	258
136	この論法に従えば	258
137	予期しない最初の日の授業視察	259
138	外れなしの数当てゲーム	260
139	あなたの死亡日を予言する	261
140	最古のイスラム教寺院	263
141	査読者の二律背反	263
142	査読結果の最悪の組み合わせ	264
143	悲惨なトートロジー？	267
144	量化子を含む標語	267
145	中国式オルゴール	268
146	クリスマス・イブ <sup>364</sup>	271
147	パロディーの実践	272
148	でっち上げ耐性	273
149	一文惜しみ	275
150	プラトンの言葉遊び	275
151	チエス問題の問題	276
152	スパイの謎	276
153	なぜ1はもっとも孤独な数か	277
154	真実の瞬間	279
155	言い逃れを逃がさない	282
156	論証とオスカー・ワイルドの『嘘の衰退』	282
157	想定の倫理	284
158	卵の行動主義	289
159	鶏よりも卵が先	289
160	楕円よりも卵が先	290

161	ガードナーの触れて解く問題	291
162	不慮の悪意	291
163	100万桁乱数表の書評	292
164	不当だが公平な死亡記事	296
165	鏡映的真理値表	297
166	ビキニ回文	300
167	靈長類の家族的類似性	301
168	最小の類似性	304
169	義理の兄弟の類似性	306
170	トルストイの三段論法	309
171	ウディ・アレンの死の願望	312
172	無限の彼方でのチェックメイト	313
173	物忘れ	314
174	最後から2番目の州	315
175	忘れ去られた哲学者としての名声	317
❀❀❀	解答 ❀❀❀	327
謝 辞		375
訳者あとがき		377

## 献　辞

私の折れた腕に

私は、物事を完成させるよりも始めるのに向いている。大詰めの習わしによって、この本の完成は、遅れに遅れた上に、遅れた！

右手を骨折して以来、左手でゆつくりとしか入力できなくなつた<sup>[原注 1]</sup>。このため、ほかのプロジェクトに取りかかれずに、ほとんど終わりかけの仕事を完成させるのにこの夏を費やすはめになつた<sup>[原注 2]</sup>。

骨折によって得られた教訓は、「無視するには些細すぎる頭の怪我はない」という救急処置室のポスターから始まった。この文は「頭の怪我がいかに些細であったとしても、無視すべきではない」と読まれることを意図している。しかし、この文が実際に意味することは、その逆である。「頭の怪我がいかに些細であったとしても、無視すべきである。」結局、この警告は「禁止するには小さすぎるミサイルはない」と同じ構文である<sup>[原注 3]</sup>。

もし腕を骨折していても、看護師の注意の目をその回復に向けさせなければならない。看護師は、それに間違った種類の関心をもつ。すぐ、CTスキャンにしっかりと頭を固定されてしまうだろう。

手術の後、私の腕はまる一日麻痺していた。このことが幻肢を見さ

[原注 1] 編集注：私たちは、ソレンセン教授の腕の骨折に関与しない。

[原注 2] そして、「米国のどの州は左手のキーだけでタイプできるか」というような変な問題に興味をもつようになった。

[原注 3] 言語学者は「無視できるほど些細な頭の怪我はない」を爆雷文とみなす。この文は、はじめに意識の表面に着水したあと、分析の深いレベルにまで貫通し、そこでその本当の意味が表面的な意味とは正反対に爆発する。

せて、ホレーショ・ネルソン（初代ネルソン子爵）の不死についての論証を不気味にも理解することになった。1797年、この英国の提督は、右腕に怪我を負った。右腕を切断されたあと、提督はその腕の存在、感じることはできるがもはや見ることはできない腕の存在をさまざまと実感した。ネルソン子爵は、なくなった後も腕があると感じるならば、人まるごとであっても同じことが起こりうると推測した。

私の折れた肢は、幻肢を乗りこえた。そのことが、わずかに右利きであり、そして微妙に両利きではない世界で、いかに左利きとなるかを教えてくれた。よい教師のように、折れた腕のおかげで、私は小説に精通し、親友はこれまでにないものになった<sup>[原注4]</sup>。

---

[原注4] 実験してみて、TEXASだけが左手のキーだけでタイプできる州だと分かった。思考実験してみて、OHIOだけが右手のキーだけでタイプできる州だと分かった。